

研究ノート

崔貞熙の小説「天脈」を読み解く
— 映画「家なき天使」、「格子なき牢獄」との関連から —

A Reading of Choe Jeong-Hui's "Cheon-Maek"

— By. Movie "Angels Lack the Home" And "Prison sans Barreaux" —

山田佳子*

YAMADA Yoshiko

1 はじめに

崔貞熙の小説「天脈」は「地脈」、「人脈」とともに発表当時より、いわゆる伝統的な女性倫理を強調した作品として解釈されてきた。しかし最近はそのような一面的な解釈に疑問が提起され、とくに「天脈」については親日文学と関連づけた見方も出てきている。それは当時の崔貞熙が親日的な文章を書いていたことのほかに、「天脈」に登場する孤児院が、実在した孤児収容施設「香隣園」をモデルにしていることとも無関係ではないと思われる。「天脈」とほぼ同じ時期に、やはり香隣園を描いた親日映画「家なき天使」が制作されていたが、数年前にそのフィルムが発見された。それをきっかけに「天脈」に再び研究の目が向けられるようになったのである。「天脈」と「家なき天使」との比較についてはすでに詳細な研究がなされており、本稿はそれに多くを拠っている。

ところで、崔貞熙は「天脈」を執筆する前に香隣園を取材し、先ず訪問記「香隣園を訪ねて」を書いた。「香隣園を訪ねて」にはフランス映画「格子なき牢獄」が、そのタイトルのみ引用されているが、そのことについてはこれまで言及されたことがなかった。「天脈」は「香隣園を訪ねて」を土台に執筆されているため、「天脈」と「格子なき牢獄」との関連について筆者はかねてより関心を抱いてきた。

本稿では上記した2つの映画、すなわち朝鮮映画「家なき天使」、フランス映画「格子なき牢獄」と関連づけた「天脈」の読解例を示す。とくに「格子な

* 新潟県立大学国際地域学部 (yamada@unii.ac.jp)

き牢獄」を用いた解釈は初めての試みであり、「天脈」の研究に新たな方向性を提示できればと思う。

2 「天脈」の概要

1941年に発表された崔貞熙の「天脈¹」は、「地脈²」、「人脈³」とともに崔貞熙の初期代表作とされる。いずれの作品も女性主人公の恋愛や結婚をめぐる当時の社会制度や慣習との摩擦と、そこから生じる心理的葛藤を描いている。すなわち、日本の植民地下で高等教育を受け、新しい知識や思想を身につけたいわゆる「新女性」らが伝統的な結婚の形とは異なる、自由な意思による男女の結びつきを求めたものの社会に受け入れられずに挫折し、与えられた生き方を受け入れて再出発するという内容である。最初に、「地脈」と「人脈」の展開について触れておく。

「地脈」の主人公は、留学中の東京から帰省したさいに知り合った妻子ある男性にひかれて同棲をはじめ、2人の子供を出産した。しかしまもなく男性が死亡してしまうと、路頭に迷った主人公は子供を預け、ソウルのキーセンの家に住み込みで働きに出ることになる。「地脈」のストーリーはここから始まる。

ソウルに出た主人公は思い切って東京時代の恋人だったサンフンを訪ねる。主人公はサンフンから求婚され、小学校入学を控えた子供にとっても戸籍は必要だったが、思い悩んだ末、主人公は一人で子供を育てていく決心をする。それは、サンフンが血のつながりのない子供を愛してくれないのではないかと考えたからだった。「地脈」には主人公以外にも、貧しさゆえに富豪の妾となり、実の子と引き裂かれたばかりか、その男の子供に疎んじられる女性、また夫の死後、自らの異性愛を優先させて実の子と別れて暮らす女性などが登場し、異性愛と母性愛との間で揺れる主人公の苦悩を強調する効果を上げている。

結局、主人公は「星が天の軌道を外れないように、私は地上の軌道を外れない忍耐と克己と誠実と勇気を持たなくてはいけない⁴」と自らに誓い、伝統的な女性の生き方、すなわち異性愛を諦め、母として子供のために生きる道を選択する。

「人脈」の主人公は父の定めた相手と結婚して申し分のない暮らしを営んでいたが、友人の夫を好きになってしまう。詩人であるその男性に主人公は以前から憧れを抱いていた。主人公は男性に気持ちを打ち明け、離婚の覚悟を告げるが拒絶され、自暴自棄で別の男と同棲をはじめ。しかし男性から「愛する人の貞淑と幸福を自分のこと以上に願ひ、祈っている⁵」と諭され、夫のもと

へ戻っていく。その後、出産を経た主人公は、「忠実な妻から真の母へ、すなわち完全な女性⁶」となることを心に誓って作品は終わる。

以上のように、「地脈」と「人脈」は女性主人公が母性を優先させることで異性愛を克服するという展開を見せる。あとで述べる「天脈」についても同様の解釈のもと、従来、これら「三脈」は主人公が伝統社会の女性倫理を受け入れて、女性の本来あるべき姿を回復していく作品であると解釈されてきた⁷。しかし最近はそのような解釈に対する疑問も提起されている。イ・ビョンスン⁸は、主人公が母性に回帰する過程に蓋然性がなく、唐突で、叙述的要約によって導かれているにすぎない⁸と指摘する。すなわち崔貞熙は母性より女性性を強調しているのであって、崔貞熙における母性とは、当時の社会において声高に叫ぶことのできない女性的な欲望を隠蔽する道具として作用している⁹のだとする。「天脈」はとりわけそのように見える作品である。

「天脈」は妻子ある男性と同棲して息子をもうけた主人公が男性の死後、生活苦に直面するという前提において「地脈」と同様であるが、「天脈」の主人公ヨニは息子の将来を考えて医者として再婚する。しかし夫は息子を虐待し、それによって息子が次第に非行化していくことに心を痛めたヨニは離婚を決意する。そして息子連れ、小学校時代の恩師が園長をしている孤児院に入って不幸な子供たちの母となって生きる道を選ぶ。

このあとヨニは園長に対して特別な感情をつのらせていく。そして抑えきれず気持ちを伝えようとするが、園長はヨニの告白の言葉を巧みに避けながら、「…胸が裂けるほど痛く、首が締め付けられる、そんな悲しみの中から、苦しみの中から歓喜を発見することのできる人間こそが正しいことも美しいこともわかる人間¹⁰」なのだと語って子供たちの中に戻っていく。ヨニは園長が子供たちみなを父でありつづけなければならないことを理解しながらも、虚ろな気持ちを収めることができない。そして物語は「ヨニがひざを折り、手を合わせ、頭を垂れ、目を閉じてじっと座り、自らの神が何なのかもわからないまま祈る習慣はこの日から始まったのだ¹¹」と結ばれる。

「天脈」のこのような結末は何を意味するのであろうか。ヨニは母性に回帰したと考えてよいのか、それとも園長に対する異性愛を克服できずにいるのか。少なくともヨニが何らかの葛藤を抱えたままであることは明らかであり、完全に母性に回帰したと考えるには無理がある。ヨニは園長に対する気持ちを諦めきれず、そればかりかヨニの気持ちを理解しながらも核心的な言葉を避け、口ごもりながら説き伏せる園長こそがヨニへの思いを抑えるために必死になっているように読めるのである。つまり「天脈」の結末は、園長がヨニに語った言

葉やヨニの祈りの姿からわかるように、孤児院のすべての子供たちの父となり、母となることは、異性への愛に苦しみ、それを乗り越えることによって到達できる気高い行為だということを表現していると解釈できる。

このように崔貞熙の三部作のうち、とくに「天脈」は、従来の解釈のように単純に異性愛に苦しむ女性主人公が母性を優先させることでそれを克服していく作品だと解釈するには疑問が残る。イ・ビョンスン¹²は崔貞熙の作品における母性について、当時の社会において声高に叫ぶことのできない女性的な欲望を隠蔽する道具として作用していると述べたが、それに続けて、1938年以後、主要な新聞が戦争の勝敗そのものを母としての女性の役割と直接結びつけ、母の覚醒を促す記事が急増したと述べ、この時期の崔貞熙の小説が母性を強調する背景には日中戦争以降の戦時体制が関与していることを示唆した¹²。崔貞熙は「天脈」と前後して、朝鮮語と日本語とを問わず、時局関連の文章を多く発表していることもあり、最近「天脈」を親日文学に位置づける解釈が出てきている¹³。

本稿では「天脈」を読み解くために、同時代に公開された2つの映画、すなわち朝鮮映画「家なき天使」と、フランス映画「格子なき牢獄」を取り上げる。「家なき天使」は当時、実在した孤児収容施設「香隣園」を描いた映画で、「天脈」に登場する孤児院も香隣園をモデルとしている。崔貞熙自身も実際に香隣園を訪れており、「天脈」を執筆する前に「香隣園を訪ねて」という訪問記を書いている。そしてその「香隣園を訪ねて」にタイトルのみ引用されているのがフランス映画の「格子なき牢獄」である。すなわち崔貞熙は当時、話題になっていた香隣園を訪れ、そのとき「格子なき牢獄」を思い浮かべ、そのイメージで「香隣園を訪ねて」を書き、それを土台に「天脈」を執筆したと推測される。その間に映画「家なき天使」も完成し、「天脈」の連載中に公開された。

3 映画「家なき天使」との関連から

映画「家なき天使」は、「天脈」が『三千里』に連載されている最中の1941年2月に公開された。これは植民地京城を舞台に、牧師の方聖貧が街の浮浪児を拾い、「香隣園少年寮」を設立して子供たちに規律正しい生活を身につけさせる一方、浮浪児たちを陰で操る悪徳な大人を悔い改めさせるという内容であり、実話に基づく。制作は準国策映画を特色とした高麗映画協会¹⁴、監督は新進気鋭の崔寅奎、シナリオは朝鮮総督府警務局図書課の嘱託を務めた西亀元貞

である。映画のフィルムは長らく行方がわからなくなっていたが、2004年に中国で発見され¹⁵、2007年に韓国でDVD化された¹⁶。

「天脈」と「家なき天使」を結びつけるものは、「天脈」に登場する孤児院、すなわち「玉水町保育園」と、「家なき天使」の「香隣園少年寮」である。香隣園少年寮は1940年春に牧師、方洙源氏によって恩平面弘濟外里に建てられたもので、その後、移転して崔貞熙が「天脈」を書いたときは玉水町にあった。

「玉水町保育園」が香隣園をモデルにしていることは崔貞熙や方洙源氏の文章¹⁷から明らかである。香隣園とは実際にどのような施設だったのであろうか。

香隣園が設立されると、『京城日報』は1940年6月20日から3日間にわたり、高岡真子なる人物による「香隣園少年寮訪問記」を連載した。方洙源氏の献身的な活動を紹介したその記事は反響を呼び、京城府庁や朝鮮総督府の関係者が視察に訪れ、早くも8月から映画「家なき天使」の制作が開始された。このような経緯からわかるように、香隣園は設立者である方洙源氏の意図がどうであれ、朝鮮総督府の施策に沿う施設であった。また現実的に、資金面での援助なしには増えていく孤児たちを養うことが不可能であった。

「香隣園少年寮訪問記」によれば、子供たちの宿舎は羊小屋を改造した建物で、朝はラッパの合図に始まる。それから点呼、皇国臣民の誓詞の唱和、ラジオ体操、「清聴¹⁸」を行ったあと、水や薪、小麦粉の運搬、道路工事、うどんの製造といった作業へと続く。製造したうどんを売って米や麦、野菜を買っていたが、資金は不足していて風呂場もなかったという。映画「家なき天使」にも様々な班に分かれての子供たちの作業の様子や、うどんの製造、国旗掲揚、皇国臣民の誓詞を唱和する場面などが映し出される。

「家なき天使」の一般公開に先立ち、『京城日報』は1941年2月11日の紀元節から4日間にわたって「『家なき天使』と社会問題」と題した座談会記事を掲載した。出席者は朝鮮総督府社会教育課長、国民総力朝鮮連盟参事、京城府主事といった役人やその夫人たち、方洙源氏、それに映画の制作関係者らであった。「南イズム¹⁹」が出ていてよかった、「皇国臣民の誓詞を唱える点などよかった²⁰」という評価の声が聞かれるとともに、「今に全鮮の不幸な子供らが跡を絶ち、たくましい皇国臣民として私共の前に現れてくれるであります²¹」と、方洙源氏の仕事に対する感謝の言葉が語られた。

では「天脈」の「玉水町保育園」はどうであろうか。建物は「童話に出てくるような家を連想させる面白い形をした家が口の字型に配置され、それを囲むように農園、果樹園、花園があつて、前には大きな川が流れ²²」、噴水もある。そこで子供たちはシルム（朝鮮式相撲）をしたり、ブランコに乗ったり、フッ

トボールや野球をし、ラッパのほかドラム、サックス、アコーディオン、バイオリンの演奏もする。日課としては、ラッパの合図で起床して掃除と朝食を済ませ、2班に分かれて農園作業と学課の勉強をし、夕食後に一日の反省を行う。「天脈」がモデルとするのは玉水町移転後の香隣園であり、そこはある富豪から提供された大きな建物だったというので²³、少なくとも羊小屋ではなかったであろうが、「童話に出てくるような家」というのはかなり誇張された表現である。また、わずかに出てくる農園作業の場面は「家なき天使」に見られるような肉体労働とはほど遠い。

このように映画「家なき天使」と、崔貞熙の小説「天脈」は香隣園という同じ孤児収容施設をモデルにしているが、与える印象はまったく異なっている。このことについてキム・ジュリは、映画の持つイメージの力を小説が備えていないためであるとし、「天脈」の「玉水町保育園」においても決められた時間に決められた活動を行い、決められた時間に食事をして、一日の終わりには必ず反省の時間が設けられているが、そのような徹底して時間表どおりに進行する日常、すなわち監獄や学校、工場のような規律が内在する世界を見えなくし、子どもたちの自律性が強調された結果、その空間が楽園のような幻想を与えるのだという²⁴。さらに「家なき天使」が香隣園を浮浪児の教化施設ととらえているのに対し、「天脈」では児童の養育施設ととらえて家族愛や献身的な母性愛といったイデオロギーを強調しているとする²⁵。そして主人公ヨニが私的な欲望、すなわち園長に対する異性愛を克服して、すべての子供たちの母となれたとき、ヨニは「銃後の婦人」として生まれ変わるのだと解釈する²⁶。

このように「家なき天使」と関連づけて「天脈」を解釈すると、崔貞熙の作品における母性の意味の変化とともに、「天脈」の特殊性が浮かび上がる。ただし、「天脈」をただちに親日文学に位置づけることは「天脈」という作品そのものだけでは多少無理がある。こうした解釈が出てくる背景には、崔貞熙が「天脈」執筆前の1940年10月12日に、「朝鮮文士部隊」の一員として京畿道楊州の志願兵訓練所を訪れ、そのときの見聞をもとに書かれた日本語小説「野菊抄」²⁷において、主人公が志願兵訓練所の厳格に規律が定められた集団生活を「何んと云ふ立派な人生勉強でせう²⁸」と肯定的に受け止める下りがあることなどとも関連していることを確認しておきたい²⁹。しかし、本稿は崔貞熙の親日性を問うことが目的ではないので、「天脈」の解釈の一例として述べるにとどめる。

4 映画「格子なき牢獄」との関連から

崔貞熙は1940年夏に『三千里』誌の記者として香隣園を訪れ、その訪問記「香隣園を訪ねて」を『三千里』1940年12月号に発表した。そこに描かれた香隣園の様子は、引き続いて書かれた「天脈」とほぼ同様で、子供たちが自由に遊んでいることが強調されている。「香隣園を訪ねて」のタイトルのあとには次のような文章が続いている。

乞食、泥棒、父母なき天涯の孤児—この哀れな子供六十三名を集め、彼らに文字を教え、品行を教え、生産事業を教え、再生の道へ導く、「格子なき牢屋」を見るがごとく聖なるこの事業と、それを先導する方洙源氏！³⁰

ここに見られる「格子なき牢屋」は、韓国語の原文でも日本語で表記されていることから、固有名詞として引用されていることがわかる。フランス映画「格子なき牢獄」(Prison sans Barreaux)のことであるとみられる。「格子なき牢獄」は1938年に制作され、ヴェネチア国際映画祭で民衆文化大臣賞を受賞した作品で、日本では1939年12月に公開された。外国映画は1939年10月に施行された映画法により上映が制限されていたが、「格子なき牢獄」は繰り返し上映される数少ない映画のうちの一つであり、当時の社会に受け入れられる要素をもっていた³¹。朝鮮においても1940年春までに公開されており、評判もよかったようである。『三千里』1940年9月号には解説が掲載され³²、同号に企画された文学と映画についての座談会でも話題に上った³³。

「格子なき牢獄」の舞台は女子感化院である。その感化院は少女たちに厳しい規則と罰を科していたが、新たに赴任した女性院長のイヴォンヌは肉体的な罰を廃止し、愛によって少女たちを更正させようと全力を尽くす。例えば、脱走を企てたネリーに対する罰は町まで遣いに行かせることだった。施設の外に出たネリーが気持ちよさそうに草原を駆ける場面は非常にすがすがしい。しかしイヴォンヌが仕事に情熱を傾けるあいだに婚約者の心が離れていき、ついにはネリーとの恋愛が発覚する。イヴォンヌの心は揺れ動くが、結局、施設に永住することを決意するとともに、ネリーを許す。そしてすでに次の職務地に赴任した婚約者のもとへ向かうネリーを見送る場面で幕が下りる。

崔貞熙はこの「格子なき牢獄」のタイトルをなぜ引用したのであろうか。実際の香隣園がどうであったかは別として、崔貞熙の目には「格子なき」自由な雰囲気映ったのかもしれないし、あるいは園長の理想を意図的にそう表現し

たのかもしれない。しかし上の引用文における「格子なき牢屋」は文脈からみて、そのような意味で用いられてはいない。方洙源氏自身とその事業が「格子なき牢屋」にたとえられているのである。

映画「格子なき牢獄」のタイトルは、「格子なき」自由という文字通りの意味のほかに、もう一つの意味を含んでいる。その真の意味は映画のエンディングで明らかになる。ネリーを見送ったイヴォンヌは最後に、「ここの真の囚人は私たち」とつぶやく。つまり映画「格子なき牢獄」は、少女たちのために一生を捧げる覚悟をしたイヴォンヌが、その犠牲的精神によって聖女として生まれ変わろうとするさまを描いているのである。この最後の場面について、当時、映画を見た梨花女子専門学校のある学生は、「イヴォンヌの悲しげな顔も、感化院の事業によって輝く－というより彼女の生きた思想によって輝く－胸がひりひりするような、うら悲しい美しさだ³⁴」と感想を語っている。

映画「格子なき牢獄」を念頭におけば、「香隣園を訪ねて」で崔貞熙が伝えようとしたものが、香隣園の園長である方洙源氏の導く「聖なるこの事業」と、その犠牲的精神であることがわかる。方洙源氏の手記「子供は天使と同じだ³⁵」には、子供たちから初めて父と呼ばれたときの喜び、自己を捨てて子供たちのためだけに生きようという献身的な気持ちとともに、子供たちの完全なる父になるための苦勞が並大抵ではないことが赤裸々に綴られている。崔貞熙は香隣園を訪問し、方洙源氏から直に話を聞きながら映画「格子なき牢獄」を思い浮かべ、そのイメージで「香隣園を訪ねて」を書き、それをさらに「天脈」へ発展させたのではないだろうか。

以上のことから、「格子なき牢獄」と関連づけて「天脈」を解釈すると、主人公ヨニの祈りは私欲を捨て、聖女として生まれ変わろうとする祈りであり、そこには子供たちすべての父となるために自己を捨て、「聖なる事業」を導く方洙源氏の苦悩と犠牲的精神が重ねられているのを読み取ることができる。

5 おわりに

本稿では崔貞熙の小説「天脈」を、同時代に制作された2つの映画、すなわち朝鮮映画「家なき天使」、フランス映画「格子なき牢獄」と関連づけて読み解いた。「天脈」と「家なき天使」はほぼ同時期に創作されているため、「天脈」が「家なき天使」から直接の影響を受けたということはないと思われる。しかし親日映画である「家なき天使」と関連づけながら「天脈」を解釈することにより、崔貞熙の作品における母性の意味の変化とともに、「天脈」という

作品の特殊性が浮かび上がった。

一方、フランス映画「格子なき牢獄」のエンディングは、映画を見た者なら強く印象に残る場面である。崔貞熙が香隣園を訪れ、園長である方洙源氏の献身的な姿に接したときに、「格子なき牢獄」の感化院とイヴォンヌを連想することは、小説家としてじゅうぶんにあり得ることである。「天脈」を「格子なき牢獄」と関連づけて解釈することにより、主人公ヨニの祈りは私欲を捨て聖女として、すなわち孤児院のすべての子供たちの母として生まれ変わろうとする祈りであり、そこには子供たちすべての父となるために自己を捨て、「聖なる事業」を導く方洙源氏の苦悩と犠牲的精神が重ねられているのを読み取ることができた。

「天脈」は結末部分の解釈しだいで様々な読み方ができる作品である。そのことは植民地末期における崔貞熙の執筆活動についての評価にも影響を及ぼす。本研究の成果も含め、今後さらなる検討が必要である。

注

- 1 崔貞熙「天脈」、『三千里』1941.1.3.4。
- 2 崔貞熙「地脈」、『文章』1939.9。
- 3 崔貞熙「人脈」、『文章』1940.4。
- 4 崔貞熙「地脈」、前掲書、p.246。
- 5 崔貞熙「人脈」、前掲書、p.216。
- 6 同上、p.221。
- 7 金宇鐘『韓国現代小説史』（宣明文化社、ソウル、1968、p.266）、李在銑『韓国現代小説史』（弘盛社、ソウル、1979、p.442）、李仁福『文学と救援の問題』（淑明女子大学校出版部、ソウル、1982、p.110）、パク・ソンギョン『現代心理小説の精神分析』（啓明文化社、ソウル、1996、p.195）参照。
- 8 イ・ビョンスン「崔貞熙の小説に表れた母性の研究」、『女性文学研究』13、2005、p.218。
- 9 同上、p.235。
- 10 崔貞熙「天脈」、『三千里』1941.4、p.298。
- 11 同上、p.299。
- 12 イ・ビョンスン、前掲書、p.221。
- 13 イ・ヨンア「崔貞熙の『天脈』に表れた「国民」形成過程」（『国語国文学』149、2008）が代表的である。
- 14 キム・リョシル『透視する帝国 投影する植民地』、サミン、ソウル、2006、p.223。
- 15 同上、p.11。
- 16 『発掘された過去』（テウォンエンターテインメント、ソウル、2007）所収。
- 17 崔貞熙の「私の小説の主人公たち」（『若い日の証言』、育民社、ソウル、p.16）には、記者時代に玉水洞にある孤児院を訪問したとき、これを小説にしてみたいという衝動を覚えた、と記されている。また、方洙源著・村岡花子編『家なき天使』（那珂書店、1943、『植民地社会事業関係資料集<朝鮮編32>』所収、近現代資料刊行会、p.104）には、香隣園を主題とした小説が書かれたということが記されている。
- 18 「清聴」とは、「朝、まだ目覚めたままの濁らぬ心のうちに、水のように清らかな心になって神の言葉をきく」ことである。これに関連し、牧師である方洙源氏は香隣園に4つの生活方針

崔貞熙の小説「天脈」を読み解くー映画「家なき天使」、「格子なき牢獄」との関連からー

ー1正直であること、2純潔であること、3自分勝手な我儘をしないこと、4心から、ホントウに愛することーを定めた。これは方洙源氏が日本で出会ったある宗教グループの掲げる「絶対の正直」「絶対の純潔」「絶対無私」「絶対愛」にならったものである（『植民地社会事業関係資料集<朝鮮編32>、前掲、p.46、69～79）。

- 19 「『家なき天使』と社会問題(3)」、『京城日報』1941.2.13。
- 20 「『家なき天使』と社会問題(4)」、『京城日報』1941.2.14。
- 21 「『家なき天使』と社会問題(1)」、『京城日報』1941.2.11。
- 22 崔貞熙「天脈」、『三千里』1941.3、p.291。
- 23 当時、京城家政女学校（京城家庭女塾＝引用者）に勤めていた朴順天の斡旋により、洪元杓という人物から提供された建物で、80室あったという（『植民地社会事業関係資料集<朝鮮編32>』、前掲、p.123～124）。
- 24 キム・ジュリ「1940年代の『香隣園』に対する2つの視線」、『現代小説研究』41、2009、p.92。
- 25 同上、p.69。
- 26 同上、p.97。
- 27 崔貞熙「野菊抄」、『国民文学』1942.11。
- 28 同上、p.144。
- 29 山田佳子「崔貞熙の短篇小説研究－『天脈』を中心に－」、『朝鮮学報』170、1999、p.141～142参照。
- 30 崔貞熙「香隣園を訪ねて」、『三千里』1940.12、p.150。
- 31 植草甚一は『植草甚一work5 フランス映画の面白さを語ろう』（近代映画社、2010、p.204）において、「特に戦争中は『格子なき牢獄』が繰返し上映されたので、レオニード・モギー（監督＝引用者）の名は極めて印象深いものとなった」と述べている。また、『キネマ旬報』第700号（1939.12.1）に掲載された「『格子なき牢獄』に対する批評と感想」には、「特に、洋画の輸入が制限されているとき、その制限内で最大の可能性を発揮してこの名作を我々の前に紹介された提供者の優れた選択と勇気とに感謝する」という声がみられる。
- 32 朴基采「鉄窓なき監獄」、『三千里』1940.9、p.176。
- 33 「女流詩人と小説家による『文学、映画』を語る座談会」、『三千里』1940.9、p.180。この座談会では毛允淑が「格子なき牢獄」を評価する発言をしている。崔貞熙も出席していたが、「格子なき牢獄」に関しては発言していない。
- 34 「梨花女専 文科音楽科学生の文化鑑賞記」、『三千里』1940.5、p.183。
- 35 方洙源「子供は天使と同じだ」、『三千里』1940.12。